

『GIFT～記憶の淵でまどろむ君へ～』

著：小塚佳哉

ill：沖麻実也

「なんだよ、史生。オレに同情した？」

おずおずと話しかけてみれば、瑛は茶化すように問いかけてくる。

史生は気分を害して、そっけなく言い返した。

「別に、同情したわけじゃない……ただ、呪いなんていうのは、あんまりだ」

「そっかな？ でも、過ぎたるは及ばざるが如しってゆーじゃん？ なんだって、よすぎても悪すぎてもダメなんだよ」

触れるものをすべて黄金に変える手を持ってたら大金持ちになれるけど、手づかみで食事もできなくなるし、好きな相手を抱きしめても金ピカの人形に変えちゃうんじゃない意味がない、と呟いた瑛は身体を起こして史生の膝から頭を上げると、さっきまで自分の髪を撫でていた手をつかんだ。史生が引こうとしても引き戻され、自然と二人は向かい合ってしまう。

すると瑛が、おもしろがるような表情になった。

「なあ、オレに同情したんだろ、史生？」

「してないと言ったはずだ。それより、おまえ、頭痛は？」

「もう治ったよ。つか、最近は薬を飲まないで治まらないような、ひどい頭痛なんて滅多に起きないんだってば」

瑛がいたずらが成功したようなウインクを投げるので、史生は顔をしかめた。

「だけど、最初に訪ねてきた時だって……」

「そう、実はあんなにひどいのは、すっげー久しぶりだった。しかも、あれから史生のことを考えるたびに、やたらと頭痛が起きそうなカンジになる。これって、おかしくない？ オレ、めちゃくちゃ気になってるんだけど」

「そんなこと、オレには関係ない。いいから手を離せ」

「やだ」

「瑛」

「やだね。関係ないワケがないじゃん？」

きっぱりと言い返した瑛は、睨みつける史生の視線をまっすぐに見つめ返す。

「オレはなんでか、たまらなく気になるんだ。史生のことが」

「それはおまえの勝手だ。だけど、オレには関係ないと何度、言えば……」

そう言い返しつつ、史生はつかまれていた手を振り払おうとした。だが、反対にその勢いで、ベッドに仰向けに転がされ、覆い被さった瑛から両手を頭の上に縫い止められてしまう。

「……瑛、離せ！」

「離してほしかったら、アルファのことを教えろ」

「ふざけるな！」

「教えてくれないと犯すぞ」

「瑛！」

「オレは本気だよ」

そう言うと、史生の上に覆い被さったまま、瑛は強引に顔を近づけてきた。

必死に顔を背けようとしたが、瑛は片手で易(やす)々(やす)と史生の両手を押さえ込んで、空いた片手で顎先を固定すると、無造作に口唇を重ね合わせてくる。

「……んっ」

思わず、喘ぐような吐息が漏れた瞬間、口唇の間に熱い舌先が押し込まれてきた。

抵抗しようと思っても、しっかりと押さえ込まれ、少しも動けずにいると強引な舌は歯列を割って、喉の奥まで滑り込み、口の中を舐(な)め回す。それに逃げまどっているうちに、頭の中が真っ白になって、なんだか自分が逃げようとしているのか、それとも無意識に誘っているのか、わからなくなってしまう。

気がつけば、執拗なキスに夢中になっていた。

こんなキスをするのは、本当に久しぶりだったからだ。いったい、いつからしていないのか、史生は不本意なキスに抗うことも忘れて、自分のかすんだ記憶を掘り起こす。(ああ、そうか、瑛としたのが最後だ……最後に抱き合った時の、その別れ際に……そうだ、あれが瑛に会った最後になってしまったから)

そう思い出した瞬間、史生は反射的に自分に覆い被さっている相手を押し返していた。

キスに夢中になっている間に、とつくに両手の拘束は緩んでいたらしい。

だが、目の前にいる相手は、不満そうに顔をしかめる。

「……なんだよ、史生？」

「よ、よせ」

「そんなエロい顔で、よせとか言われても、まるで説得力ないよ。だいたい、ついさっきまで、ノリノリでキスに応えてきたくせに」

「そんなことはない！」

どちらのものともわからない唾液に濡れた口唇を片手で押さえつつ、真っ青になった史生は首を振った。けれど同じように濡れた口唇を手の甲で拭い、瑛は苦笑を浮かべる。

「もしかして、史生って自覚ねーの？」

「……じ、自覚？」

「うっわー、信じらんねー、マジで無自覚なんだ？」

瑛は本気で驚いたように眩くと、史生をまじまじと見下ろした。

「だって史生ってさ、最初に会った時からずっと、なんか言いたいことがあるそーな顔つきでオレを見てたじゃん？ しかも今みたいにエロい目つきで」

「べ、別に、そんな……」

「それに受付のオンナだって、史生は仕事に厳しくって冷たいとか言ってたけどさ、オレには甘いよな？」

そりゃもちろん、口ではきつついことも言うけど、頭が痛いって言えば膝枕してくれるし、朝から押しかけてきても出てきてくれるし、家にも結局、入れてくれるし、と自慢するようにニヤニヤと笑っている瑛に言われ、史生は舌打ちしたくなった。彼に気を許してはいけないと思っていたのに、ちっとも徹底できていなかったことに自己嫌悪を感じる。

しかも、あらためて手をつかまれても振り払うことができず、手のひらを重ねながら

指先を絡めるように握り込まれ、史生は顔をしかめた。けれど、その不機嫌な顔を見下ろしたまま、瑛はニヤリと微笑む。

「史生ってさ、こうやって手をつかむと、すっごくキンチョーするよな……なんでオレのこと、そんなに意識してるワケ？」

「い、意識なんて……してない」

「してないワケねーじゃん……ほら、今だって、すっげえ熱くなってるし」

そう呟くと、瑛はつかんだままの史生の手を引き寄せて、その甲に口唇を押しつける。

あたたかな吐息と口唇の感触に、ビクンと敏感に身を震わせれば、確かに鼓動は跳ね上がり、体温も上昇していく。しかも、口唇を押しつけるだけでなく、手の甲から指先まで熱い舌先で舐めるようにたどられ、史生は身体を強張らせた。

「ほら、そんなふうにビクビクするから、オレだって意識すんだよ」

「……だ、だったら、離せっ」

「やだ」

喘ぐように訴える史生の手をつかんだまま、瑛は間髪入れずに答える。

「だって、オレ、史生のこと、触りたくてたまんねーんだもん。こーやってると、すっげー、ドキドキするってゆーか、楽しくてたまんないの、どーしてなんだろう」

しかも触るだけでめちゃくちゃ気持ちいいし、と独り言のように呟き、瑛は史生の首筋に顔を埋めてくる。あわてて仰け反って逃げようとしても、指を絡めた手はたやすくシーツの上に押さえ込まれてしまい、ねっとり熱い舌先で耳(みみ)朶(たぶ)を舐められ、飄(なぶ)るように甘噛みをされると、史生はビクビクと全身を震わせた。

「や、やめろ、瑛……」

「やめない。ホントにやめてほしかったら、さっさとアルファのことを教えろよ」

「……そ、それは」

きっぱりと告げる瑛に言い返すこともできず、史生は口唇を噛んだ。

教えることなどできない。自分の口からは何も言えない。それだけは譲れなかった。

すると口ごもる史生を見下ろしたまま、瑛は嘲笑うように口元を歪めて、はだけたシャツの襟元を荒っぽく左右に開いた。

「瑛、やめろって……！」

「だから、やめてほしいなら話せよ、アルファのことを」

本文 p156～161 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>